有島武郎研究

―『或る女』の成立をめぐって㈤―

宮野光男

一

本論は、「有島武郎研究―『或る女』の成立をめぐって㈣―」〔梅光女学院大学国文学研究第七号　昭四六・一一、以下㈣と称する〕で試みたキーワード分析による前篇の葉子像解明に続くもので、後篇における葉子像の特色を明らかにしようとするものである。方法は㈣と同様で、笑いと涙とを中心にしながらいくつかのキーワードの分析を試み、そのことを通して葉子の内面性の一側面に触れてみたいと思う。このことは、㈣がそうであったように、これまでに続けてきた「有島武郎研究―『或る女』の成立をめぐって㈠、㈡、㈢―」〔梅光女学院大学国文学研究第四、五、六号　昭四三～四五　以下㈠、㈡、㈢と称する〕での葉子像解明の試みの確認、あるいは、『或る女』とキリスト教との関係を明らかにすることを通して知りえた葉子像の一特色〔「有島武郎研究―『或る女』とキリスト教―」近代文学研究第一輯　昭四七・八〕の実証、さらには『三部曲』論〔瀬沼茂樹・本多秋五編『有島武郎研究』所収　右文書院　昭四七・一一〕で示した、有島の新しい愛の論理追究の特色と限界についての考察などに関連するものである。

二

『或る女』前篇の最後の章、二一章で見せている葉子の笑いには内に一抹の寂寥感を湛えながらも一応の落ち着きを見い出すことができる。それは、前篇の中で中心的であった攻撃と防禦との間を揺れ動くたけだけしい笑いではなく、「體の何處かが揺られる氣」がするような、「わざと引き締めて見せた唇の邊から思はずも」「潜み出た」笑いであり、葉子と倉地との関係が、これから迎えようとしている世間の指弾や、生活上の困難さ、それにも増して内面に潜む根源的な不安にも堪えてゆかねばならぬ課題―それは「恐ろしい凶夢」に象徴されているものでもあるが―を持ってはいるものの、ともかく、なにはともあれ、一応の落ち着きを得たことの顕われであるということができよう。それは、倉地との関係において、葉子が愛される者となることができるかも知れないという、彼女の期待に対する一種の安堵感の表明でもあろう。

『或る女』後篇は、前篇の、このような状況を受けて始まっているのである。二二章冒頭部分に見られる港町横浜の旅館での長閑な朝の情景も、そのまゝ葉子の心的状況を映し出したものであろう。

有島はそれを、倉地の、「九時だな今打つたのは」という「塩がれ聲」に、「どれ程熟睡してゐても、時間には鋭敏な船員らしい倉地の様子が何んの事はなく」「微笑」んでしまう葉子というぐわいに描いているのである。そして、その日が「天長節」であると聞いただけで「葉子の心はなほ〳〵寛濶にな」り、長い航海での彼女の上に起った大きな変化を、まるで他人事のように思い浮かべるにつけ「何がなしに希望に燃えた活々した心」になることができるというのも、葉子の心の状態が安定したものであり、彼女が望む愛される者としての生活が、あるいは可能なのではあるまいかという予感が横溢しているからである。木村に、出す気もなく書いてみた偽りの手紙を畳の上に投げ出したとき、「我れにもなく冷やかな微笑が口尻をかすかに引きつら」〔三〇〕すことはあっても、三一章の、二六の歳を迎えた明治三五年の正月ころの葉子は、

倉地を喜ばせる事が自分を喜ばせる事であり、自分を喜ばせる事が倉地を喜ばせる事である、さうした作爲のない調和は葉子の心をしとやかに快活にした。〈三一〉

というように、調和のとれた愛を確信することのできる女であるかの様相を呈しているのである。

ところで、㈣で指摘したように、葉子の笑いには、多くの場合本心を顕わにするものよりも、人間関係の中で、どちらかと云えばそれを悟られまいとする防禦的なものが多いのであるが、後篇においてもそのことは云えそうである。すでに述べてきた安定期の笑いの中にもそれを見ることができる。倉地と、またある時には雙鶴館の女将を交えてする高笑い〈二三〉や、倉地と苔香園わきの家の庭を整えながらもらす笑い〈二七、二八〉を考えてみても、その背後に忍び寄る底知れぬ不安を、どうしても払拭しきることのできない葉子であることを知らなくてはならないのである。そのことを端的に表わしているのが葉子の涙である。

木部との間に生まれた定子への涙、それは葉子の母としての一面を理屈抜きに表わしているものであり、倉地との関係が例え安定状態にあったとしても一向に奇異の念を覚えないということができるが、倉地を思い、倉地を前にしてする涙は、「譯の解らない」〈二六〉涙とはいうものの、実は葉子の倉地への疑惑―「自分はひよつとするとあざむかれてゐる、弄びものにされている」〈〃〉のではないかという―が、つまり、倉地の愛を完全に信じることのできないもどかしさが、その背後に潜んでいるのである。有島は、それを倉地の妻と三人の娘に対する嫉妬というかたちで、

倉地の言葉をそのまゝ信じて、素直に嬉しがつて、心を涙に溶いて泣きたかつた。然し萬一倉地の言葉がその場遁れの勝手な造り事だつたら…何故倉地は自分の妻や子供の事は云つては聞かせてくれないのだ。葉子は譯の解らない涙を泣くより術がなかつた。葉子は突伏したまゝでさめざめと泣き出した。〈二六〉

というように描き出しているのである。

倉地との愛の関係を成り立たせようとする切なる願いの故に、それが「魂を締め木にかけて、その油でも搾りあげるやうな悶えの中に已むに已まれぬ執着を見い出す」〈二六〉ような苦悩であるにもかゝわらず、葉子がその試みを中断することのできないのは、もし倉地の愛を失ったならば「世の中から奇麗に離れてしまつた孤獨な魂がたつた一つそこには見い出されるやうに思へ」〈〃〉るからである。

葉子の孤独、それは「唯自分の心が、幸福に淋しさに燃え爛れてゐるのを知つてゐた」〈二八〉というように、時には一種の哀感を伴いつつも幸福をより味わい深いものに色づけてもいる。また、倉地との関わりをより深めてゆかんとする過程にあっては「没頭」すべき「孤獨」であり楽しいものですらあった〈二九〉。しかし、実は、それが葉子にとって、いかに根深い否定的状況であったかは、葉子の倉地への「出來るならその肉の厚い男らしい胸を嚙み破つて血みどろになりながらその胸の中に顔を埋めこみたい」〈二六〉という、まことにすさまじい傾倒ぶりを見ることによって理解することができよう。この、いささかグロテスクな感じのする表現の中に表わされている、葉子の「肉體を破つてまでも魂を一つに溶かし度いとあせる」〈二八〉、思いは、狂気じみた、あるいは病的とも思えるような倉地との愛欲葛藤絵巻の、いわば下絵であり、それは、葉子の孤独に端を発する、一体化願望とでも云うべき根源的な願の描出に他ならないのである。かくまで、葉子の孤独は根深く、彼女の思いを悽絶ならしめていたことは、以下章をおって激しくなる嫉妬のさま、あるいは愛慾のさまが明白に物語っているのであるが、そのことを思うにつけ、後篇冒頭部分にみられる微笑によって表わされている心的安定状況が、葉子の理想状況、つまり倉地との関係を可能にする変身成就の姿の瞥見であるということができるのである。

三

三二章から三七章までの葉子は、笑いを中心にしてみた場合、倉地との間になされる「微笑みかはし」〈三二〉がある一方、木村に対する「せゝら笑い」〈三三〉、古藤への高慢な嘲笑〈三四〉、田川夫人への憎悪に満ちた笑い〈三六〉など多彩である。倉地に対しても、時にはあでやかな「妖婦にのみ見る極端に肉的な蠱惑の微笑」〈三三〉を、あるいは「劍を持つた笑ひ」〈三六〉をもって接するなど、表面的には優位性を保っているかに見える。しかし、倉地に対しては、その笑いの背後にかならず涙をもって相対している葉子であることを知るときに、彼女の立場がけっして優位なものではなく、ましてやその心中には最大の危機を迎えて震へ戦いているであろうことを想像するに難くはないのである。そこには、先にみた孤独な葉子が、その不安な状況から必死に脱却せんともがいている葉子が存在しているのである。たとえばあの竹柴館での夜にみせた、葉子の「忘我渾沌の歡喜」〈三四〉が、「何もかも微塵につき摧いて、びりびりと震動する炎々たる焔に燃やし上げた—有頂天の歡樂」〈三三〉であり、それがたとえ「傍眼には酸鼻だとさへ思はせるやうな肉慾の腐敗の末遠」いものであるような、凄惨をきわめたも

のであったことも、その関係の中に、

〔葉子に取ってはこの忌はしい腐敗の中にも〕一縷の期待が潜んでゐた。一度ぎゅつと摑み得たらもう動かないある物がその中に横たはつてゐるに違ひない、さういう期待を心の隅から拭ひ去る事が出來なかつたのだつた。〈三四〉

という期待を持っていた葉子であることを知ることができるのである。そして、葉子は「〔戀をしかけたあのひけめとして、今まで〕自分が倉地を愛する程倉地が自分を愛してはゐないとばかり思つた。それが何時でも葉子の心を不安にし、自分といふものの居据り所までぐらつかせ」〈三四〉ていたので、「ある限りの手段を取つて悔ない」〈〃〉思いにかりたてられ、その孤独と不安とを克服しようとしているのである。葉子について、とかくその「不可犯性の凡てまで惜しみなく投げ出す」「娼婦」〈〃〉、あるいはそれ以下の、葉子の性の歓楽をそのまゝのかたちで問題にしがちであるが、有島は、それも葉子にとっては、孤独と不安の状況を克服するための一つの手段として描いているということができるのである。

さて、そのような試みをし果てた末の葉子が、倉地との関わりから得たものは、いったい何であったのだろう。それは「有頂天の溺樂の後に襲つて来る淋しいとも、悲しいとも、果敢ないとも形容の出來ないその空虛さ」〈三五〉であった。

縱令その場で命を絶つてもその空虛さは永遠に葉子を襲ふもののやうにも思はれた。唯これから遁れる唯一の道は捨て鉢になつて、一時的のものだとは知り抜きながら、而してその後には更に苦しい空虛さが待ち伏せしてゐるとは覚悟しながら、次ぎの溺樂を逐ふ外はなかつた。〈三五〉

このところで、はからずも(一)で指摘した姦淫の女 Ego の姿を見い出すことができるのである。「我〔Ego〕遂に一人の夫を持ちき。されども我が愛は成就せられず。我が心は痛ましく悲しき大なる空虛を得ぬ。」〔日記、明三六・二・八〕という Ego の苦悶の声は、田鶴子や前篇の葉子の存在と行動の根底を顕わにする魂の希求の声であったが、今、倉地との関係を通して、癒やされるどころか、なお一層葉子の心の奥深く刻み込まれている事実を知ることができるのである。ところで、この葉子の否定的な状況をもっともよく理解している者が『或る女』には形象化されている。それは、木村である。前篇では、葉子自身が木村を通して、つまり木村を鏡の如き存在として対置することによって自らの不安の状況を知っていたが、後篇では、「葉子さん、貴女の心に空虛なり汚點なりがあつても萬望絶望しないで下さいよ。」〈三〇〉と、木村の口を通して葉子の否定的状況を指摘させているのである。有島の、人間観における空虛感が、切実なものであればあるほど、作品の、このような木村の存在が、単に一個の俗物クリスチャンの役割以上のものであるにちがいないという予想も成り立つのである。相手が木村であるために、倉地にそのすべてを賭け、他の一切のものが目に入らぬ盲目の状況にある葉子にとって、この木村の手紙の言葉が持っている

本当の意味を理解することのできないのは当然のことであるが、「貴女をそのまゝに喜んで受け入れて―苦しみがあれば貴女と共に苦しみ、貴女に悲しみがあれば貴女と共に悲しむものがこゝに一人ゐる事を忘れないで下さい。」〈〃〉という木村の言葉は Ego をして「懽喜と自責と感謝との涙に震ひ戦」〔日記、前出〕かしめた愛を示しているという意味において、有島の待望している新しい愛の論理の開示者としての役割を与えられているということもできるのである。『或る女』における倉地と木村との位置関係がいずれかの時点において逆転する可能性を―作品の世界に即していえば葉子がどうしても木村と絶縁してしまうことのできない事実にあわせて、考えておかなければならないところなのである。

さて、先に指摘した葉子の空虚感が、章をおうにしたがって、幻想のうちに「虚無」を思い〈三九〉、さらには幻覚症状のうちに一切のものが虚構であることを見い出してしまい〈四六〉、その果に「皆んな虚構だ。……」〈四八〉と涙ながらに叫ばなくてはならない状況へと進展してゆくさまは、一方において葉子の病状が進行しつつあることを示す一つの方法であると同時に、他方では、葉子の魂の叫びが、作品全体を通して流れている主調音のように繰り返されていることを表わしているところでもあろう。これは、有島の後期の作品に顕著に表われている虚無思想―たとえば『酒狂』〔大一二・二〕のBのことばなど―に通じるものであるばかりでなく、さかのぼっては『かん〳〵蟲』〔明四三・一〇〕のヤコフ・イリイッチの言葉「空の空なるかな總て空なり」をも想起しうるものであるという意味で、有島の基本的な人間観の一側面であるということができよう。いささか後半の部分にはみ出してしまったが、葉子の、このような自己認識、内面的苦悩が、この段階での笑いと涙とを特色づけているということができるのである。

四

前章では、笑いと涙との分析を通して、葉子の心中に去来する感情の波のかなたに潜む空虚感を考察したが、この思いが葉子の日常において実感されているもう一つのありさま、廃墟感について考えてみたいと思う。

自分の心で何もかも過去は一切焼き盡して見せる。木部もない、定子もない、ましてや木村もない。皆んな捨てる、皆んな忘れる。その代り倉地にも過去という過去は悉皆忘れさせずにおくものか。〈二六〉

過去否定が廃墟意識の一顕現であることはすでに述べた〔四、「『或る女』とキリスト教」〕。もちろん、葉子のこの段階での過去否定は、意識的には新生を意図していることに間違いない。しかし葉子が、「辛うじて築きあげた永遠の城塞が、果敢なく瞬時の蜃氣樓のやうに見る見る崩れて行くのを感じて、倉地の胸に抱かれながら、殆んど一夜を眠らずに通してしまつた」〈二八〉のは、新生を支えるべきその関係が、あたかも砂上の家の如く、もろくも崩壊してしまうものでしかないことを知ったからであろう。砂上の樓閣を

自らの人生にひき比べてみる態度、もちろんそれは有島の、すでに米国留学当時からの自己認識であったことは、「我は我が立つ處を知らず。嘗て巌の如しと思へる基礎の容易に壊れ去る事如何に砂上の家の如きよ。」〔日記、明三九・二・八〕という言葉からも明らかであるが、[註1] この砂上の家としての人間観が、葉子の、倉地との関わりの中に愛を見い出さんとして失敗する生活そのものとして実感されているのである。このような、「葉子が命も名も捧げて」―つまり、全存在をかけてかかった「新らしい生活」が、その「土臺から腐り出して、もう今は一陣の風さへ吹けばさしもの高楼も、もんどり打つて地上に崩れてしまふと思ひや」〈三九〉らねばならぬさまというものは、人間の手で神の座に達せんとして失敗したバベルの塔のイメージ[註2]にも通じる挫折の姿であるが、これは前篇の考察〔四、「『或る女』とキリスト教」〕で明らかにした呪われた者、カインの末裔意識を持った存在としての葉子の意味している廃墟的存在の、有島による意図的な深化であるということができよう。葉子の住む家から眺めやられる苔香園の「十二月の薔薇の花園」の「淋しい廃園の姿」〈二九〉はその意味でまことに象徴的なものなのである。葉子の倉地との関係が、所詮は実らぬものであることを云い表わしているような「淋しい廃園の姿」、このような状況にある葉子が、一切のものを空虚なものに思いなし、その身は滅びゆくものであることを、死の思いに託して嘆くのもまた当然のことであろう。「とうとう倉地の心と全く融け合つた自分の心を見出した時」ですら「葉子の魂の願は生きようといふ事よりも死なうと云う事だつた」〈二八〉と思わざるを得なかったというのも、喜びの強調表現ではなく、存在それ自体が実は死によって支えられたものでしかないのかも知れぬという予感が、葉子の潜在意識の中に働いていたことのあらわれなのである。それは「唯このまゝで眠りのやうな死の淵に陥れよかし。」〈〃〉と詠嘆的に死を讃美することで終ることのできない、本来的な意味での否定的状況としての死であったにちがいないのである。

五

葉子を捕えてはなさぬ死の思いを今一度、異った観点から考察してみよう。そこで再び葉子の「有頂天の溺樂の後に襲つて來る―空虚」〈三五〉な思いを思い出してみたいと思う。有島は、葉子がはてしない空虚の果に、倉地とともに手をたずさえて「底止する所のない何處か」〈〃〉へ迷い込んでしまうのだという。いったい彼らの落ち行く先きは何處―いかなる状況だというのであろうか。

竹柴館で一夜を明かした葉子が知ったのは、自分が落ち込んでしまった「深淵の深さ」〈三三〉であった。それは倉地との愛慾生活が、一種の泥沼の様相を呈していることの象徴的表現でもあろう。しかもそれが事態の進展とともに―すなわち葉子の病状が悪化の一途をたどり、もはや、とうてい再起不可能の状況、死の問題ではなく、死そのものを実感せざるを得なくなってしまった状況の中で、さらに、倉地との関係が決定的な破局を迎えてしまった状況の中で、葉子は、自分の「居る所には何處にも底がない事を知らねばならな」く、「深い谷に誤つて落ち込んだ人が落ちた瞬間に感ずるあ

の焦燥」〈四七〉に襲われ、「深さの分らないやうな暗闇」〈〃〉によって取りまかれていることを不可抗的に認めざるを得ない者として描かれていることからも、この深淵転落感が、葉子にとっては、空虚感の、つまり、廃墟意識の、いわば具体的認識として彼女の内部に定着しているさまを表わしたものであるにちがいないのである。

深淵、それは、無定形、曠空、暗黒などの語句と同様に「荒野の事態」を表示する言葉であるという。[註3] それは、たしかに世界にあっては悪魔の跳梁を、地上の暗黒と混沌と無秩序とを意味しているであろうし、一人の人間の内面にあっては、精神の荒廃と魂の死とを意味しているのであろう。有島が葉子の内部に見ようとしている死、換言すれば深淵の意味が、倉地との関係の破綻という事態を通して、具体的に示されているところなのである。

六

『或る女』後篇の後半の部分、三八章以下の葉子の様相は、分量からすれば涙する場面の方が、笑の場面よりはるかに多く、一つの行為の後は、かならずといってもよいほどに涙で締めくくられているところに特色を見ることができる。それは、倉地に対する希求の思い、意の通じぬことへのもどかしさ、今得ていると思うものまでも失ってしまうのではないかという焦燥感、あるいは、倉地を奪わんとしているものへの文字通りの憤怒と嫉妬の思いのこもった涙であり、倉地に相対峙している葉子の裸の魂の露呈した状況であるということができよう。ところで、ここで倉地という男が、葉子にとっていかなる存在として描かれているのか、㈣で指摘した倉地像の範囲について考えておきたいと思う。たしかに、愛の論理の実現を関係の中で見い出すためには、人格関係を条件とするだけに、葉子と対等の、あるいは葉子と同じ程度に形象化された倉地を予想してしまう。㈣の指摘の根拠もそこにある。しかし、まことに奇異な感じになってしまうのであるが、後篇においても、当然、変化していてよいはずの倉地が、いっこうに変化していないのである。葉子の嫉妬に対してする倉地の釈明があまりにも常識的なものであること、何と説明してみても、葉子には決して通じていないこと、もちろんそれには葉子の堅く閉ざされた心のすさまじさが背後にあることを物語ってはいるのだが、それにもまして、たとえば葉子の内面の苦悩を、その嫉妬の内側に見ようともせず「貴様は俺れに厭きたな。男でも作り居つたんだろう」〈三八〉と、こともなげに一言のもとに云い捨てる倉地として描かれているところに至っては、所詮葉子との人格関係を期待することの無意味な存在であることを思い知らされてしまうのである。もちろん、だからといって倉地が充分形象化されていないということはできないであろう。[註4] むしろ、有島は、そのような倉地を、前篇と同様、充分に描き盡しているのであろう。そして、ごく平凡な、まことに常識的な、ある意味では通俗的な倉地を描くことによって、ひとりあがきをしている葉子を明確にしようとしているのではないだろうか。つまり、葉子の内面における期待と破綻とのさまを映し出す鏡としての存在、それが倉地なのではないだろうか。このように考えてくると、元来他人の前で泣

くことをこの上なく屈辱的なことであると思っていた葉子が、倉地の前で、コケットリーとしての涙ではなく裸の魂の露呈したものとしての涙を流すこともまた自然のことだということになるのである。

さて、涙にくらべると、この段階での笑いは大変少い。しかし、妄想にとり憑かれた葉子が、倉地の下宿している宿でみせた「物凄い笑顔」〈三九〉によって有島は、前篇にみられた、葉子の倉地の愛に対する懸念、つまり自分に注がれた倉地の力が、「自分を征服すると共に總ての女に對しても同じ力で働くのではないか」〈一七〉という不安感が、今や実感として葉子にせまってきていることを、象徴的に表わしているのではないだろうか。だから、久しぶりに見せている愛子への「にこにこしながら立つて蚊帳の側によつて「愛さん……愛さん」と「可なり大きな聲で呼びかけた」笑いが、「銀の鈴のやうな澄み透つた聲で高調子に物を言ひながら」の「涼しい」「笑い」〈四四〉であったとしても、実は、貞世の病いの回復期を迎えたことからくる一種の安堵感の、倉地との関係に反映した一方的な安らぎの間接的表明でしかないのであって、この笑いとても、倉地と愛子との関係を妄想し嫉妬することの材料に、簡単に転化してしまう不安定なものなのである。そして葉子は「如何しても遁れ出る事の出來ない」「倉地に對するこちんと固まつた深い執着」のために、「もう自分の心根を憫然に思つてそぞろに涙を流して、自らを慰めるといふ餘裕すらなくなつてしまつ」〈四四〉っているのである。

内側に嫉妬と猜疑の思いを秘めた葉子の笑い、それは、もはや狂乱のさまを思わせる、乾いた、不気味な悲鳴にも似ている。岡に対してする「狂女のやう」な「高々」とした「物狂ほしい」笑い〈四八〉は、葉子の「自分に對して凡ての人が普通の人間として交らうとしない、狂人にでも接するやうな仕打ちを見せる」〈〃〉という思いと相俟って、葉子狂乱のさまを描き出したところであるということができよう。「お前〔つや〕は私を氣狂ひとでも思つてゐるんだらうね。〔中略〕私はちやんと死ぬ覺悟をしてゐますからつてね。〕〈〃〉という葉子の姿は、もち論病気の亢進状況を物語る一つの方法でもあろう。しかし、妄想、嫉妬、猜疑、ヒステリー症状など、それらのものが、回復しがたいまでに悪化してしまった婦人病のもたらす、それ特有の症状であったとしても、そのすべての症状の背後に、倉地との関わりの中に、自らの唯一の確かさを見い出そうとする気持が核のように潜んでいることを、その後にくる涙が物語っているとするならば、やはり原因としての孤独感—空虚感、廃墟感—を、結果としての病的症状よりも中心的ことがらとして受けとめなくてはならないだろう。その意味においてこの葉子狂乱のさまは、愛を得るためには裏切りをもあえてする女、デリラの「皮肉な残酷な笑ひ」〔『サムソンとデリラ』大八・一二〕を、あるいはまた、「晝の光にも私は怖れてはゐまい。太陽の光よ、さあ私を御覧。私はお前よりも美しいんだよ。…」〔『聖餐』大八・一二〕と悪態をつく娼婦マグダラのマリヤの狂態を、そして更には、「全愛を酬はれ」んとして、あえて姦淫の罪を犯した Ego の、空虚より発した狂乱〔日記、明三六・二・八〕に通じるものであり、まさに

それは聖書に描かれている「七つの悪霊に憑かれた女」マグダラのマリヤ〔㈡、㈢〕を彷彿とさせるものなのである。

七

葉子の、笑いと涙の分析を通して垣間見てきた心的状況を、有島に対してなされた「虚無への転落」[註5]という言葉で表現することは、葉子の孤独と不安からくる空虚感、あるいは絶望的状況を廃墟意識において認識するしかた、それらの具体的認識としての深淵転落感が、葉子の内的事実であるという意味において、正鵠を得たものであるということができよう。しかし、葉子の最後のありさまを、有島自身の最後と重ね合わせてする否定的位置づけは、時間的圧縮のもたらす誤解の可能性をはらんでいるがゆえに、また、葉子の内実の読みちがいという点において、いささか問題であろう。なぜならば、葉子が死の床で呻吟しながらも、最後の望みを内田に託していることも、その一つの顕れであることはすでに述べたところであるが〔『或る女』とキリスト教〕、涙の分析を通して、葉子の根源的な願望が、死に臨んだ葉子の内部になお根強く残されていることを知ることができるからである。

…昨夜の事は夢ではなかつたのだ…而して今見るこの景色も夢ではあり得ない…それはあまりにも殘酷だ。殘酷だ。何故昨夜を界にして、世の中は加留多を裏返したやうに變つてゐてはくれなかつたのだ。

この景色の何處に自分は身を措く事が出來よう。葉子は痛切に自分が落ち込んで行つた深淵の深みを知つた。而してそこにしやがんでしまつて、苦い涙を泣き始めた。〈三三〉

ここで竹柴館で一夜を過した場面をもう一度取り上げてみたいと思う。この夜に賭けた葉子の願いがいかなるものであったかを知ることのできるこの部分は、ある意味では後篇の一つのクライマックスの場面でもあるが、とくにここで、葉子が「世の中」が「加留多を裏返したやうに變」ることを期待していることに留意しなければならないのである。

倉地との関係が、すでに見てきたように、本質的には葉子のひとりずもうであり、あくまでも葉子の側の一方的な、「倉地に於て今まで自分から離れてゐた葉子自身を引き寄せ」〈三三〉ようとするものであったとしても、それに対する葉子の願いが、自己の新生であったであろうことは、「その翌日十一時過ぎに葉子は地の底から掘り起されたやうに地球の上に眼を開いた。」〈〃〉という表現からも察せられるのである。なぜならば、それは『カインの末裔』〔大六・七〕の仁衛門が「一人の自然から今掘り出されたばかりのやうな男」〔『自己を描出したに外ならない「カインの末裔」』大八・一〕と描かれていたのと同じように、「人間の己むに己まれぬ生に對する執着の姿」をその中に見ようとする有島の思いがこめられた人物像だからである。ところで、葉子の、「世の中」が「加留多を裏返したやうに變」ることへの期待をいうものは、竹柴館での体験をさかいにして、身の置き所のない景色、つまり仁衛門に即し

て云えば「嚙み合はなければならない」、人間を「繼子扱ひ」にするものとして認識されている「自然」から、そうではないもの、への変化への期待であり、換言すれば葉子自身の変化――すなわち存在の根底から全く一変してしまうことへの願望――変身願望を意味しているのである。そうでないかぎり、葉子にとっては、自己の状況があくまでも「落ち込んで行つた深淵」で苦悩するものでしかなく、そこでは「懺悔の門は堅く閉ざされ」「暗い道がただ一筋」〈〃〉、果てしもなく横たわっていることのみを知る者でしかないことを痛感せざるを得ないものだからである。

葉子の変身願望、それは「生れかはらなければ恢復しやうのない自分」〈二四〉を見い出すところに端を発しているが、それでは、「間違つてゐた……かう世の中を歩いて來るんぢやなかつた」〈四七〉と思い知った葉子にとって、いかなる生き方が残されているというのであろう。いかなる状況であれば変身を遂げたことになるのであろう。倉地との関係の中に、愛される者である自己を見い出さんと願った前篇での葉子の変身願望が、後篇においてもののみごとに否定されてしまった、あるいは否定せざるを得ない自己認識に到達してしまった葉子の、それにもかかわらず、あるいはそうであるが故の変身願望とは、いったいどのような内容をもったものなのであろう。

葉子の変身願望を解明する一つの手がかりとして、末尾における内田への期待の分析の可能性を指摘した〔『或る女』とキリスト教〕が、もう一つ、仮説として言及してみたいと思う可能性がある。それは、葉子の愛子憎悪を通してみられる詩的女性への変身願望である。

愛子が葉子の憎悪の対象として描かれていることはすでにいくつかの指摘もあるように、たしかにそれは「敵の間諜」〈二九〉あるいは「内部の敵」[註6]としての愛子への憎しみの表現であり、また葉子が失なわんとしている「若さ」〈三五〉を持っている者に対する嫉妬のあらわれでもあろう。そして、さらに、岡、古藤、そして倉地までが、自分の把持から離れていってしまうのではないかと思う一種の被害妄想にも似た嫉妬の亢進[註7]のさまが、愛子への憎悪というかたちであらわされているのである。しかし前篇から通してみると、葉子の愛子憎悪は、外発的な状況に対する現象的な反応だけではないように思われるのである。「何んとなく性の合はないこの妹」〈六〉とか、「〔性が合はないと云ふのか、〕気が合はないといふのか、普段愛子の顔さへ見れば葉子の氣分は崩されてしまふのだつた。」〈八〉という愛子は、たしかに、葉子の心をかきみだす存在なのである。それが前篇では判然としたかたちで描かれていないのであるが、後篇になると愛子が倉地や岡などの対象となるという意味で一種のライバルとしての資格と条件とがそなわった状況におかれることによって、具体的に描かれてくるわけである。

憎悪が、愛と同様関係概念であるということは、有島自身の「憎みとは人間の愛の變じた一つの形式である。〔中略〕私が憎みはじめたならば、もうその器は私と厳密に交渉をもつて來る。」〔『惜みなく愛は奪ふ』十九章〕という考え方の中にもあることだが、確かに憎しみという心の動きは、愛と同様、対象に対して無関心ではいられない関心を基調とするものであろう。そして、心から持つこ

とを願いながら、現実には持ちえていないものを持っている他者に対してなされる羨望の激化したものであろう。つまり憎悪とは願望の一変形と考えることのできる心の動きではないだろうか。このように考えてくると、葉子の愛子に対する憎悪は、たんに現象的なものに左右されるものだけではなく、もっと生の根本に関わるものとしての、葉子の根源的な、自己保存に関わる願望を見ることができることになるのであるが、それはいったいどのような内容を具体的にもったものなのであろう。

この問題を考えるにあたって、まずとりあげることができるのは、愛子の「眼」である。葉子の心をかきみだすその眼は、時には「その眼は相變らず淫蕩に見える程極端に純潔だつた。純潔と見える程極端に淫蕩だつた。」〈三二〉と描かれるようなものでもある。これがたとえ葉子の妄想であったとしても、かくまで執拗なまでに愛子の眼が葉子に意識されているということは、その中に、葉子の潜在意識の中にある根源的な願望と密接に響きあうものを見ているからではないかと思われるのである。

大多數の男はあんな眼〔悲しい眼付きのやうだけれども、悲しいといふのでもない。多恨な眼だ。多情の眼であるかも知れない。〕で見られると、この上なく詩的な靈的な、一瞥を受け取つたやうにも思ふのだらう。〈二四〉

「詩的な靈的な一瞥」――ここで、はからずも、有島が理想とする女性、あのベタニヤのマリヤによって象徴的に表わされている Poetic-woman を想起することができるのである。このところに、葉子が愛子の中に「妄念」と思わねばならぬほどに見つめていたものが、詩的女性としての本性であり、それが「ぢつと明るみを見詰めている」「多恨な眼」〈三一〉として、葉子にせまってきていることを表わしているように思われるのである。

先に、『或る女のグリンプス』の田鶴子像形象化にあたって、「罪の女」を中心にしてベタニヤのマリヤとマグダラのマリヤをその振幅の上限と下限とにもつ Poetic-woman 性がその否定的契機として位置づけられていることを述べ〔三〕、さらに葉子像の内に『聖餐』のマグダラのマリヤにおいて見られた Poetic-woman 性の有無を解明することが、葉子像理解の一つの方法であることを指摘した〔四〕が、その観点からすると、後篇の葉子は、その Poetic-woman 性を欲しながら、いまだ自らのものとはしていない存在だということになるだろう。これはあくまでも一つの仮説にすぎないのだが、ここに、葉子の変身願望の具体的な内容を見ることができるように思われるのである。

八

『或る女』後篇にみられる葉子の変身願望、それは愛子憎悪というかたちで、わずかに顕わにされている詩的女性への変身でもあろうが、有島の願いに即していえばそれを可能にする新らしい愛の論理の待望ということに他ならないであろう。このように考えてくると、すでに明らかにした前篇の葉子像もまた変身を願う女性として

描かれていたことから、全く同じ次元の葉子像が形象化されているのかという疑問が生じるが、前篇の葉子像と後篇のそれとには、その内面性において、換言すれば有島の創作意図において一つの差があることを明らかにしなければならないのである。

絶対的存在である倉地との関わりの中に彼女の根源的な生の孤独と不安とを癒やすものを見い出さんとし、その愛に生きる者としての変身を願った前篇の葉子に対して、後篇の葉子は、その倉地との関係の中に、人間の限界状況を見い出さざるを得なかった存在なのである。つまり、倉地の存在が、葉子の空虚を、絶望的廃墟感を、死の深淵に陥ち込む恐怖を、癒やすどころか、かえってその中に「地獄」〈四〇〉を見なければならなかった葉子なのである。そのような状況にあってなお変身を願う者であるとするならば、前篇が葉子への、あるいは、葉子を通してなされた一つの問であるのに対して、後篇は、それに対する答えにあたるものだということができよう。それは保留づきの、なおさらに新らしい愛の論理を追求しつづけねばならぬ答えなのである。内村鑑三がいみじくも「楽園を離れしアダムが他の方面における楽園回復の努力」[註8]であると看破した方法によって、ということになるのかもわからないが、それは同じ変身願望とはいえ、前篇のそれとは内容的には霄壌の差のあるものなのであって、有島が、『或る女』以後、さらにどのように、その問題を追究をしてゆくかが、改めて問われるところなのである。その意味において『或る女』の次に刊行された著作集『三部曲』〈大八・一二〉における新らしい愛の論理追究は、それに対する有島の一つの解答への試みでもあろう。

註1　瀬沼茂樹氏は日本近代文学大系「有島武郎集」〈角川書店昭四五・三〉解説で、有島の『惜みなく愛は奪ふ』の到達点が「砂上の楼閣と化する虚無主義の不吉な前兆をみせていた。」と指摘しているが、これは『惜みなく愛は奪ふ』と『或る女』との関係を考える一つの重要なポイントであろう。

註2　創世記第一一章三節～九節

註3　山本和「神と悪魔の闘争」〈『神と悪魔』創文社　昭三二・一一所収〉

註4　安川定男氏は『或る女』論〈「有島武郎論」明治書院　昭四二・一一所収〉で、倉地形象化の不充分さについて触れて「そのために葉子が煩悶し苦悩し輾転反側する姿に、ひとり相撲の感じがどうしてもつきまとうように思われる」と述べている。

註5　佐古純一郎「有島武郎における虚無への転落」〈『近代日本文学の悲劇』昭三二・一二所収〉

註6　西垣勤　『或る女』再論〈「有島武郎論」有精堂　昭四六・一〇〉

註7　江頭太助　『或る女』の基本問題―『性の心理学的研究の影響』について―〈「文学・語学」第一一号　昭三四・三〉

註8　内村鑑三　「背教者としての有島武郎氏」〈大一二・七　万朝報〉